



Title	J.R.R. トールキンの作品群における近親婚のタブー
Author(s)	
Citation	令和6（2024）年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書．2025
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/101248">https://hdl.handle.net/11094/101248</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 令和6年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな氏	いしい みずほ 石井 瑞穂	学部 学科	外国語学部外国語学科スウェーデン語専攻	学年	1 年
ふりがな 共 同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員氏名	山田雄三	所属	人文学研究科		
研究課題名	J.R.R.トールキンの作品群における近親婚のタブー				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				
<b>1.研究目的</b> <p>トールキン世界においてインセスト・タブーは相当に重いものとして扱われ、近親婚に相当する範囲も五親等ないし六親等と比較的広いものであり、特徴的なものである。しかしこれまでトールキン世界のインセスト・タブーがもたらす悲劇については多く語られてきたものの、インセスト・タブーの定義について徹底的に分析した研究は殆どない。作中において破滅の重要なファクターとなるインセスト・タブーに注視してその定義と位置づけを確認することには重要な意義がある。</p> <p>トールキン世界におけるインセスト・タブーがどこまで一貫性を持ったものであるかについて議論し、トールキンが作品の中で近親婚をどのように位置づけているかについて考察する。</p>					
<b>2.研究方法</b> <p>以上の研究目的を達成するため、以下の方法で研究を進めた。</p> <p><b>①インセスト・タブーの具体例</b></p> <p>インセスト・タブーについて以下の例について粗筋を確認し、それぞれ特徴を理解する</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>マイグリンとイドリル</li> <li>トゥーリンとニエノール</li> <li>アル＝ファラゾーンとタル＝ミーリエル</li> <li>ヌーメノールにおける王家の婚姻</li> <li>近親婚の定義の一貫性について</li> </ol> <p><b>② クッレルヴォとトゥーリン</b></p> <p>①で検討した中で最も採用元がはっきりしているトゥーリンとニエノールの場合についてトールキンが着想を得た『カレワラ』の『クレルヴォ物語』</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>クッレルヴォとトゥーリン</li> <li>トールキンの用いたモチーフについて</li> </ol>					

**③アル＝ファラゾーンとタル＝ミーリエルの原稿の変遷**

- 1 原稿の変遷
- 2 トールキンの意図

**④トールキン世界における近親婚の位置づけ****④結論と今後の展望****3.インセスト・タブーの具体例**

トールキン世界においてインセスト・タブーに触れた者たちは例外なく悲劇的な最期を遂げているが、その他にも呪いなど悲劇的な最期に影響する要因があることが多い。インセスト・タブーは呪いの引き起こした悲劇の一環の文脈で語られることもあり、インセスト・タブーが犯された状況がどのような文脈で語られているか、どれくらいの重みを以て語られているかも考察する必要がある。また、インセスト・タブーが犯された例はいずれも王家での出来事である。

ここでは

- ・インセスト・タブーが起きた男女の組が属する氏族
  - ・インセスト・タブーが起きた親族関係（きょうだい乃至はいとこ）
  - ・インセスト・タブーが起きた状況（インセスト・タブーと知ってのことかどうか、互いの同意の上でのことかに特に注目）
  - ・インセスト・タブーによって引き起こされた結果
- について主に記述する。

**3.1 マイグリンとイドリル**

第一紀の隠れ王国 Gondolin が舞台。王の娘 イドリル と王の甥 マイグリン、血縁関係は従姉弟。

ゴンドリンの王 トゥアゴン の妹 アレゼル が「防備固いゴンドリンの都に倦み」<sup>1</sup>ゴンドリンを去った先でナン・エルモスのエルフ・エオルと結婚してもうけた息子がマイグリン。内密にエオルのもとを離れマイグリンを連れてゴンドリンを訪ねたアレゼルを追ってきたエオルがアレゼルを殺害したのち処刑され、マイグリンはトゥアゴンの庇護を受ける。処刑時にエオルがマイグリンに「この地でお前は、お前の望みのすべてを失うであろう。そしてお前も、いつかここでわたしと同じ死を死ぬがよい」と叫び<sup>2</sup>、それが呪いとなつてのちにマイグリンも同じ場所で死ぬことになる。

マイグリンは王の娘 イドリル に対して「イドリルの美しさを愛し、望みもなくかの女を得たいと欲した」<sup>3</sup>が「イドリル地震がマイグリンを全く愛していなかった」<sup>4</sup>。

ここでエルダールにおける近親婚への意識が描写されている。「エルダールはこれほど近い親族とは結婚せず、それまでは誰一人そうしたいと望んだ者もいなかった」<sup>5</sup>「近い親族へのこのような思いは

<sup>1</sup> 『新版 シルマリルの物語』 p.232

<sup>2</sup> 『新版 シルマリルの物語』 p.244

<sup>3</sup> 『新版 シルマリルの物語』 p.245

<sup>4</sup> 『新版 シルマリルの物語』 p.246

<sup>5</sup> 『新版 シルマリルの物語』 p.245

(中略) エルダールが昔から受け取っていたように、奇異なもの、心にある歪んだものの現れとして映じたからである。同族殺害のもたらした悪しき果実であり、それによって、マンドスの呪いの影が、ノルドールの最期の望みの上(ゴンドリン)に落ちたのである」<sup>6</sup>「近い親族(原文: kin so near)」がどこまでを指すのかは明確ではないが、エルダールの近親婚への忌避感が明確に描かれている。

ニアナイス・アルノイディアドの後にエダイン・ハドルの族のトゥオルがゴンドリンを訪れ、ウルモのゴンドリンを捨てて海に出るようにとの助言をもたらす。しかしトゥアゴンこれを容れず、マイグリンもそれに同調。やがてイドリルとトゥオルは惹かれ合い、トゥアゴンの承認を得て結婚、ふたりの間に半エルフのエアレンディールが誕生する<sup>7</sup>。

かくてマイグリンのイドリルへの恋慕は破られた。そののち、マイグリンはゴンドリンから出てはならないという王の命令に背いて外に出た際にモルゴスの部下に捕らえられ、拷問で脅されてゴンドリンの場所と襲撃方法を明かす。モルゴスがマイグリンに「ゴンドリン陥落の暁には、かれの家臣としてこの都の統治を行わせ、イドリル・ケレブリンダルを与えることを約束」すると、マイグリンには「上古の歴史の中で最も忌むべき裏切り行為も、かれとしては、イドリルへの欲望とトゥオルへの憎しみの分だけ容易に思われたのである」<sup>8</sup>。近親への恋慕が裏切り行為を引き起こしたようにも捉えることのできる描写も近親婚のタブーがいかに重いものか語るのに一役買っている。

マイグリンの最期を記しておく。「都の劫掠からイドリルを救出すべく、トゥオルが急ぎ駆けつけると、マイグリンがかの女とエアレンディールに手をかけていた。トゥオルは城壁の上でマイグリンと取っ組み合い、かれを城壁の外に放り投げた。マイグリンの身体は、アモン・グワレスの岩壁に三度ぶつかり、焰の海の中に真っ逆さまに落ちていった」<sup>9</sup>。悲劇的な最期の原因のどこまでが近親への恋慕でどこまでがエオルの呪いかは定かではないが、いずれにせよ近親への恋慕が忌むべきものとして扱われているのは変わらない。

### 3.2 トゥーリンとニエノール

第一紀のベレリアンドが舞台。エダイン三家のひとつハドルの族(異訳:ハドル王家)の族長フーリンの長男トゥーリンと長女ニエノール、血縁関係は兄妹。

トゥーリンとニエノールの父モルゴスのかけた呪いが子供たちにわざわいをもたらしたことが描かれる。グラウリングに記憶を奪われたニエノール<sup>10</sup>すなわちニーニエル(逃亡先でトゥーリンが命名)と成長した妹の姿を知らないトゥーリンが結婚<sup>11</sup>、グラウリングの死と共にニエノールに記憶が戻り近親婚のタブーを犯したことを知り(「さようなら、二重に愛するお方よ! ア トゥーリン トゥランバール トゥルーン アンバルタネン、運命によって支配された運命の支配者よ! ああ、死

<sup>6</sup> 『新版 シルマリルの物語』p.246

<sup>7</sup> 『新版 シルマリルの物語』p.407

<sup>8</sup> 『新版 シルマリルの物語』p.408

<sup>9</sup> 『新版 シルマリルの物語』p.409

<sup>10</sup> 『新版 シルマリルの物語』p.173

<sup>11</sup> 『新版 シルマリルの物語』p.181

ぬのが仕合せです！」<sup>12)</sup>、崖の縁から身を投げて自害。彼女の自害の場に居合わせたブランディアによってその死とニーニエルが妹であることを知らされたトゥーリンはブランディアを殺害<sup>13)</sup>、グアサングの切っ先に身を投じて自害<sup>14)</sup>。

兄妹婚のタブーについて直接的に語る文言はないが、真実を知ったニエノールの行動から第一紀のエダインの間では兄妹婚がタブー視されていたのは明白である。また、トゥーリンとニエノールの結婚が「モルゴスのかけた呪いによってもたらされたわざわい」の流れの中に位置することから近親婚のタブーが重いものとして扱われていることが察せられる。モルゴスがフーリンにかけた呪いについては“Children of Húrin”、『シルマリルの物語』収録「ニアナイス・アルノイディアドのこと」（「モルゴスは、フーリンとモルウェンとその子孫を呪い、闇と悲しみの運命をかれらに下した」<sup>15)</sup>）を参照。

### 3.3 アル＝ファラゾーンとタル＝ミーリエル

第二紀のヌーメノールが舞台。ヌーメノール王アル＝ファラゾーンとヌーメノール女王/王妃タル＝ミーリエル、血縁関係は従姉弟。

ヌーメノールの王は第二十代の王の頃からヴァラールへの反逆を顕わにしていたが、第二十四代の王タル＝パランティアが悔い改め、ヴァラールへの反逆から廃止されていた儀式などを復活させた。その娘がタル＝ミーリエルで、本来なら彼女が王位につくはずだったが、タル＝パランティアの悔悛をよく思わないアル＝ファラゾーンが彼女を妻に娶って結婚、王位についた<sup>16)</sup>。この近親婚はヴァラールへの反逆の文脈の中で語られている。

ここでヌーメノールにおける近親婚について明確な記述がある。「ファラゾーンはかの女の意に反し、無理やりかの女を妻に娶った。かの女の意に反した結婚であることが悪いだけではなく、たとえ王家の中であろうと、再従兄妹以上に近い血縁同士の結婚を認めないヌーメノールの法に照らしても悪しき行為であった」<sup>17)</sup>

アル＝ファラゾーンは最終的にサウロンを「王の内々の相談事に最も近く与らせ」<sup>18)</sup>、その甘言に従ってヴァラールの住む地に攻め入り、「アマンの地に足を印した国王のアル＝ファラゾーンと有限の命の戦士たちは、崩れる山々の下に埋まってしまった。かれらはその地の忘却の洞窟の中に、最後の戦いと最後の審判の日まで閉じ込められていると言われる」<sup>19)</sup>。

<sup>12)</sup> 『新版 シルマリルの物語』 p.198

<sup>13)</sup> 『新版 シルマリルの物語』 p.203-204

<sup>14)</sup> 『新版 シルマリルの物語』 p.208

<sup>15)</sup> 『新版 シルマリルの物語』 p.338

<sup>16)</sup> 『新版 シルマリルの物語』 p.445-446

<sup>17)</sup> 『新版 シルマリルの物語』 p.446

<sup>18)</sup> 『新版 シルマリルの物語』 p.448

<sup>19)</sup> 『新版 シルマリルの物語』 p.460

一方、タル＝ミーリエルはあくまでも「無理やり」従弟の妻とされ、アル＝ファラゾーンの数々の悪行にも関わっている描写もない。彼女自身がヴァラルに反逆する意図を持っていたか父王と同じく悔悛する気であったのかも明確な描写はなく、アル＝ファラゾーンによってその名をエルフ語「タル＝ミーリエル」からアドゥーナイクの「アル＝ジムラフェル」に変えられたという描写<sup>20</sup>が辛うじて彼女が父王と同じ思想を持っていたことを示唆するのみである。彼女自身の最期は「泡立つ波頭を持った紺碧の冷たい大波が山のように盛り上がってかぶさり、銀よりも象牙よりも真珠よりも美しい王妃タル＝ミーリエルをその懷に抱き取った」<sup>21</sup>と描写されている。これはタル＝ミーリエルの最期が死すべき運命の人間が「忘却の洞窟の中に最後の戦いと最後の審判の日まで閉じ込められている」というアル＝ファラゾーンに与えられた罰とは異なっていることを示唆しており、アル＝ファラゾーンとタル＝ミーリエルのケースについてインセスト・タブーを破った責任はアル＝ファラゾーンに帰するのではないかと考えられる。

### 3.4 ヌーメノールにおける王家の婚姻

近親婚を厭うヌーメノール法だが、ヌーメノール王家においては第六代タル＝アルダリオンの時代に「王の世継はエルロスの家系のものとししか結婚してはならず、これに背いた者は王の世継ぎたる資格を失う」<sup>22</sup>という条項が加えられている。主たる理由はタル＝アルダリオン自身の寿命の違う妻エレンディスとの悲惨な結婚生活への反省であるが、始祖王から第五代の王まで王の子どもは3~4人いて、第六代の王の頃には近親婚のタブーに抵触しない遠さの「エルロスの家系」の人数が十分にいたこともこの条項の成立を助けたかもしれない。近親婚をタブー視しながら親類との結婚を求めるヌーメノール法もアル＝ファラゾーンとタル＝ミーリエルの婚姻に影響した可能性がある。

### 3.5 近親婚の定義の一貫性について

トールキンの作品群では一度もインセスト・タブーの対象として描かれたことはないが、ヌーメノール法における「再従兄妹以上に近い血縁同士の結婚を認めない」という基準に照らして考えると再従兄妹同士にあたるこの夫婦もインセスト・タブーを犯していることになる。しかし、ここで原文を読むと「再従兄妹以上に近い血縁同士」は”those more nearly akin than cousins in the second degree”であり、正確には「再従兄妹より近い血縁同士」を表すので再従兄妹同士の結婚は法に触れないと読むことができる。なお、”the History of Middle-Earth XII”収録,”The history of Alallabêth”でも同様の記述は見られ、これについては変化していないことがわかる。

“the law of Númenór that forbade marriage even in the royal house between those more nearly akin than cousins in the second degree.”<sup>23</sup>

『指輪物語』に登場するガラドリエルとケレボルンは三つの指輪のひとつネンヤの力によって守られ

<sup>20</sup> 『新版 シルマリルの物語』p.446

<sup>21</sup> 『新版 シルマリルの物語』p.460-461

<sup>22</sup> 『終わらざりし物語 上』p.295

<sup>23</sup> “the History of Middle-Earth XII”p.160

た地ロスローリエンの主として描かれる。彼らは良き助言者であり、前述の三例のようなインセスト・タブーによってもたらされる暗い運命を想起させることはない。強いて言えば彼らの娘ケレブリアンがオークに捕らえられて苦しめられ、中つ国に生きる喜びを失い大海を渡って去ったこと<sup>24</sup>は暗い運命と言えるかもしれないが、本人たちにわざわいが降りかかっていない点で前述の三例とは一線を画している。やはりトールキンの作品群におけるインセスト・タブーは再従兄妹より近い血縁同士のものとして定義することができそうである。

ヌーメノール王家でも再従兄妹同士の結婚は見られる。第十六代の女王タル＝ヴァニメルデは「タル＝アタナミアの同じ世代の子孫である夫ヘルカルモ」と結婚している。タル＝アタナミアはタル＝ヴァニメルデの曾祖父にあたる。「タル＝アタナミアの同じ世代の子孫」は彼ら二人が共にタル＝アタナミアの曾孫であると言い換えられるので、再従兄妹同士の婚姻のケースとなる。

なお、再従兄妹ないし六親等での結婚例はガラドリエルとケレボルン、タル＝ヴァニメルデとヘルカルモのケースでしか見られず、それ以外の明らかになっている親族同士の結婚は七親等以上離れていることが基本である。

但し、ヌーメノール法とエルフ族に適用される法は必ずしも同じとは限らないので、トールキンの作品群におけるインセスト・タブーが再従兄妹より近い血縁同士のものとして断定するのはまだ早い。

しかし、ヌーメノール法はエルフ族に多分な影響を受けていると考えられる。ヌーメノール王家の始祖エルロス・タル＝ミンヤトゥアはエルダール三王家とエダイン三家すべての血を継いでおり、初期～中期のヌーメノール人は彼ら自身の言葉（アドゥーナイク）と共にエルフ語も用い、エルダールを友として暮らしていたためである。

また、ガラドリエルとケレボルンの血統を見ると、ガラドリエルがエルダール三王家全ての血を継いでいるため、再従兄妹同士の結婚がインセスト・タブーに抵触しないのはエルダール三氏族に共通ではないかと考えられる。マイグリンとイドリルのくだりて語られた近親婚の描写でも「エルダール」と一括りにされているので、エルダールにおけるインセスト・タブーの定義は共通と見ても良いだろう。

#### 4. クッレルヴォとトゥーリン

中つ国における近親婚の例のうち、最もモチーフがはっきりしているのがトゥーリンとニエノールの場合である。”The story of Kullervo”の序文でも紹介されるように、トゥーリン・トゥランバールはフィンランドの民族叙事詩『カレワラ』の一角をなす『クッレルヴォ物語』をモデルとして作られている。彼の悲劇的な英雄としての側面やドラゴンスレイヤーとしての側面がアイスランドのエッダやソフォクレスの『オイディプス』から採られていることについても言及されているが、今回は近親婚について取り扱う為これらは割愛する。本章では主に『カレワラ』とトゥーリンとニエノールの場合<sup>25</sup>について比較する。

##### 4.1 クレルヴォとトゥーリン

<sup>24</sup> 『新版 指輪物語 4巻』p.138

<sup>25</sup> 『終わらざりし物語 上』収録「ナルン・イ・ヒーン・フーリン」

トールキンが最初に読んだ『カレワラ』は W.F.Kirby による英語版で、これが最も良く知られている『カレワラ』であり、それ以前の 25 の Runos<sup>26</sup>から成る『古カレワラ』との比較では『新カレワラ』と呼ばれる。以降、『フーリンの子ら』と『カレワラ』の比較においては 50 の Runos<sup>27</sup>から成る所謂『新カレワラ』を参照する。なお、『カレワラ』は 19 世紀半ばに成立した民族叙事詩でありフィンランドのナショナリズムの高揚と相互に作用している。この点もイングランドの神話を作ろうと試みたトールキンが共鳴を覚えたことは想像に難くない。

トゥーリンとニエノールの近親婚とそれに続く彼らの最期は『カレワラ』におけるクッレルヴォとその妹とかなりの部分で重なる。まず、トゥーリンとニエノール、クッレルヴォとその妹は兄妹でありながら長じて出会うまで全く面識がない(his unwitting incest<sup>28</sup>)。次に、ふたりは出会って結ばれるまで(身体関係を結ぶまで)お互いの正体に気づくことはない。最後に、互いの正体に気づいた後、絶望のあまり妹の方は川に身を投げて死に、兄は自らの剣に語り掛け、剣の切っ先に身を投じて死ぬ。

トールキンは細部に変化を加えているが、それは『カレワラ』における結婚の価値観と中つ国における結婚の価値観の違いからであろう。『カレワラ』においてはクッレルヴォがある乙女を妹と知らず、彼女の意志を無視して櫓の中に引き込む。『カレワラ』の結婚譚では乙女を櫓の中に引き込んで犯す表現がよく用いられる為、クッレルヴォの場合においても同じだろう。しかし『フーリンの子ら』ではトゥーリンとニーニエルが互いに惹かれ合う様子と婚礼の様子が丁寧に描かれる。また、ニエノールはモルゴス配下の竜グラウルングによって記憶を失っており、トゥーリンやニエノールに降りかかる悲劇もモルゴスの齎した呪いの所為であるとされている。

トールキンの目的はあくまで神話の構築であり、各地に伝わる民族説話を収集して民族叙事詩に仕立て上げた『カレワラ』とは目的が異なっている。子供を親元から離して粗雑に扱ってはならないというクッレルヴォ物語における説話のニュアンスは『フーリンの子ら』には見られず、ここにその目的意識の違いが表れている。なお、クッレルヴォの養育者は彼を間違って育てたと描写されるが、トゥーリンの養育者は彼を慈しみ最大限の庇護を与えている。

#### 4.2 トールキンの用いたモチーフについて

ここで興味深いのは、イングランドの神話を構築することを目的としたトールキンがソフォクレス『オイディプス』に代表される母子相姦を採用しなかったことである。近親婚のタブーは直系尊属ではなく傍系血族(きょうだいあるいはいとこ)においてのみ現れる。寓意を嫌いながら近親婚のタブーにおいて、歴史的権威のあるギリシャ神話に代表される母子相姦ではなく後代になって収集された説話的要素の強い『カレワラ』を参考をしているところにはイングランドの神話の構築というよりもむしろトールキン個人の価値観が反映されているのではないか。

#### 5 アル=ファラゾーンとタル=ミーリエルの婚姻に至る過程

<sup>26</sup> “Kalevala” W.F.Kirby, p.VIII

<sup>27</sup> “Kalevala” W.F.Kirby, p.VIII

<sup>28</sup> “the Story of Kullervo”, Introduction



本章ではアル＝ファラゾーンとタル＝ミーリエルの婚姻についての原稿の変遷について扱う。この二人の婚姻に至る過程については多様な原稿が残されており、原稿の変遷についてもクリストファー・トールキンが幾らかの考察を加えている。本稿ではこの変遷課程からトールキンがアル＝ファラゾーンとタル＝ミーリエルの間のインセスト・タブーをどのように位置づけているのか考察していく。

### 5.1 原稿の変遷

まず、『シルマリルの物語』として出版された稿では前述したようにアル＝ファラゾーンとタル＝ミーリエルの婚姻は非合意のものとして描かれる。("Pharazôn took her to wife against her will" Sil, p.332)

次に HoME11 に収録されている"Akallabêth"を参照すると、以下に示すように二人の婚姻の過程に関して三つのパターンがある。

(a)Elentir the brother of Amandil loved her, but when first she saw Pharazôn her eyes and her heart were turned to him, for his beauty, and for his wealth also.<sup>29</sup>

(中略)

Pharaôn [arose?] and came to her, and she was glad, and forsook the allegiance of her father for the time, being enamoured of Pharazôn.

(b)Cut out friendship. Ar-Pharazôn's policy to Amandil was due to his wife?

(中略)

his(Ar-Pharazôn's) eyes and hearts were turned to her;

(中略)

Zimrahil was betrothed to Elentir Amandil's [?order] brother and heir of Númendil.<sup>30</sup>

(c)For Elentir Amandil's brother loved her, and she had turned her heart( to him, and it was known that soon they would be betrothed.<sup>31</sup>

they(Lords of Anadúnë) had aided Tar-Palantir and supported his daughter.<sup>32</sup>

HoME11 においてはミーリエルの恋人ないし婚約者としてエレンティアが登場する。(a)ではミーリエルの愛が向かうのはエレンティアだが、(c)(d)になるとミーリエルの気持ちが向かうのはファラ

<sup>29</sup> "the History of Middle-Earth XII"p.160

<sup>30</sup> "the History of Middle-Earth XII"p.161

<sup>31</sup> "the History of Middle-Earth XII"p.162

<sup>32</sup> "the History of Middle-Earth XII"p.162

ゾーンになる。(b)では特にミーリエルの愛が向かう先について言及はない。(d)と『シルマリルの物語』においてはエレンティアの存在は消えている。これについてクリストファー・トールキンが言及している部分を以下に引用する。

It would be natural to suppose that these phrases made their first appearance in this text, which was dashed down on the page, and that they were repeated in the rider, which was a manuscript written with great care; and in that case it would have to be concluded that my father discarded this story of the love of Amandil's brother Elentir for Zimrahil, and of her turning away from him and from the Elf-friends and glad acceptance of Pharazôn, before writing the final version. But I doubt that this was the case.<sup>33</sup>

It is not perfectly clear to me how the textual puzzle presented by these writings is to be resolved, but I am inclined to think that, contrary to appearance, the text (a), (b), and (c) in fact followed the emergence of a doubt in my father's mind whether the marriage of Parazôn and Zimrahil was indeed 'against her will', and the sketching of a new story on the subject.<sup>34</sup>

HoME11 の原稿(a)～(d)がどの順番で書かれたかは定かではなく、アル＝ファラゾーンとタル＝ミーリエルの婚姻の過程について何度も変遷があったことだけが確かなようである。

また、(b)ではミーリエルの愛がファラゾーンとエレンティアどちらに向けられているかについて言及はなく、以下に示す記述があるのみである。

## 5.2 トールキンの意図

以上より、トールキン自身がアル＝ファラゾーンとの婚姻がタル＝ミーリエルにとって意に沿うものとして扱おうとしたのかそうでなかったのかは判然としない。

トールキンがタル＝ミーリエルの意志について何度か変更を加えたことについては、タル＝ミーリエルが父の亡くなる時まで独身でいたことへの説明を意図していた可能性がある。なぜなら「結婚が遅い」とされているタル＝パランティアでも 82 歳で長子をもうけているのに対し、タル＝ミーリエルがアル＝ファラゾーンと結婚したのは 138 歳だからである。

しかし、HoME11 ではアル＝ファラゾーンとタル＝ミーリエルの最期については変更は加えられていない。この婚姻がタル＝ミーリエルの意に沿うものであったか否かはインセスト・タブーの果たす破滅に特に影響はないようである。

## 5. トールキン世界におけるインセスト・タブーの位置づけ

それぞれの例から、トールキン世界におけるインセスト・タブーはそれが意図されたものであるかどうか、合意の上でのものであるかに関わらず「インセスト・タブーが犯された」という事実が重要なようである。意図せずインセスト・タブーを犯したトゥーリンとニエノールの場合は破滅が齎され、

<sup>33</sup> “the History of Middle-Earth XII”p.160-161

<sup>34</sup> “the History of Middle-Earth XII”p.163

ミーリエルの意志の有無に関わらずアル＝ファラゾーンとタル＝ミーリエルには破滅が訪れる。翻って、マイグリンの恋慕にイドリルが応えなかった場合では破滅が訪れるのはマイグリンのみであり、イドリルは破滅を免れる。

また、それぞれの破滅はインセスト・タブーのみに端を発するものではない。いずれもモルゴスないしはサウロン、つまり暗黒の王の齎す災厄の一端という要素を持っている。つまり、トールキン世界におけるインセスト・タブー暗黒の王の呪いや甘言によって齎される破滅を助長するものとして機能しているのではないか。

## 5. 結論

以上、トールキン世界におけるインセスト・タブーの一貫性とそれの齎す結果からトールキンがインセスト・タブーをどのように扱っているか分析を試みた。インセスト・タブーに着目してトールキン作品を分析することはトールキンがイングランドの神話を構築するにあたってどこに焦点を置いたか考察するにあたって意義は大きいと思われる。また、インセスト・タブーの一貫性について今回はヌーメノール法を参照したが、エルダールの慣習法<sup>35</sup>に異なる記述が存在する可能性がある。今回参照した『カレワラ』の他に、アーサー王伝説やギリシャ・ローマ神話、北欧神話の影響を考慮する必要もある。今後も引き続きトールキンが書いたテキストと彼が影響を受けた神話の影響についての検討を続け、トールキン作品のより深い理解・分析に取り組みたい。

## 文献目録

J.R.R.Tolkien. (1977). *The silmarillion*. London, Great Britain: HarperCollinsPublishers.

J.R.R.Tolkien. (1980). *Unfinished Tales*. Houghton Mifflin.

J.R.R.Tolkien. (1985). *The History of Middle-Earth III The Lays of Beleriand*. Houghton Mifflin  
Harcourt.

J.R.R.Tolkien. (1997). *The History of Middle-Earth XII The Peoples of Middle-Earth*.  
HarperCollins.

J.R.R.Tolkien. (2002). *The History of Middle-Earth:Index*. HarperCollins.

<sup>35</sup> "the History of Middle-Earth"収録"the laws and customs among Eldar"

J.R.R.Tolkien. (2016). *The story of Kullervo*. Houghton Mifflin Harcourt.

J.R.R.トールキン. (1967). 新版 指輪物語 四巻. 新宿区: 評論社.

J.R.R.トールキン. (2003). 終わらざりし物語 上. (山下なるや, 訳) 渋谷区: 河出書房新社.

J.R.R.トールキン. (2003). 新版 シルマリルの物語. (田中明子, 訳) 新宿区: 評論社.

J.R.R.トールキン. (2003). 新版 指輪物語 追補編. (瀬田貞二 田中明子, 訳) 新宿区: 評論社.

エリ阿斯・リョンロット/著 小泉保/訳. (1967). フィンランド叙事詩 カレワラ 下. 新宿区:  
岩波書店.

エリ阿斯・リョンロット/著 小泉保/訳. (1976). フィンランド叙事詩 カレワラ 上. 新宿区:  
岩波書店.

W.F.Kirby. (2018). *Kalevala: The Land of Heros; Volume 1*. Franklin Classics.

W.F.Kirby. (2015). *Kalevala: The Land of Heros; Volume 2*. Andesite Press.